

414
4

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





法隆寺大鏡

第三七集

大正
13.3.31
製本

法隆寺大鏡第三十七集挿圖解説

第一、第十三、合利殿内陣



合利殿の遺立に就ては先に其の障子繪を説くに當りて略ぼ大要を述べたり。(第三十集本集殿内安置する所の靈寶及び内陣の莊嚴具を擧げて精鑑に資せんとす。少しく文獻の徴すべきものを掲げ、經營の先後錯綜せる事情を明かにして、先の所説の足らざるを補はん。古今目録抄に次合利殿三間繪殿三間中間一問惣七間也、南面也との記事あり。少くとも現時見るが如き兩殿合一の制の、既に嘉禎寛元の間に存せし事之に據つて疑を容れず。同抄の記者は又昔合利在正堂、自中比行信大僧都遺堂、別所安之云々といひ、合利殿の天平年中創建せられし事を説けども記事簡にして盡さず、繪殿に就ての記載又明瞭を缺きて、其所謂別所の堂の當時の合利殿に合するものなりや否やを知るに由無し。古今一陽集は此の行信遺立説に疑を挿みて行信建堂安別處文此一句難誼也、隨而考數帖古記、自天平之頃迄承久之時、不視有別處之證文、自元祿壞頓倒之義所不能被見也といひ、更に聖壽抄に據りて承久創建の説を認めんとす。同抄に曰く、松尾勝月上人入唐時、彼國人問云、南無佛、御舍利拜、耶達磨寺詣、彼寺塔立、云々、而上人未拜南無佛御舍利、又未詣達磨寺、塔有無不知、然而唐人思、虛言御舍利拜、達磨寺詣、塔有答玉、歸朝後初拜御舍利、今合利殿被建立畢、其以前夢殿安置、毎日御出時外、兼結緣等難義ナル故、今合利堂被奉移畢、之と對照すべきは別當次第の記事なり、曰く

承久元年己卯自二月廿六日造營御舍利堂二ヶ年造立畢、承久四年壬午三月十一日御舍利殿太子御影尊智法眼奉圖繪、思ふに承久造營の事は之等の記載に據りて疑ふの餘地無しと雖も、疑問は其の創建か修造若しくは再造かになり、然るに古今目録抄は又曰く

今案、太子御所等此御舍利殿北面東西分齊也、其所以者、合利堂修造之時、合利堂長已角南方一丈餘行、東廊内石壇之際、門柱根、古一本堀出、西一本、東一本、其間一丈餘也、其時人、昔宮之門柱思、面々住戀慕之心云云

文中所謂合利堂修造之時を明記せざるも、寧ろ記者が見聞中の近時にあるを想見せしむるものあり。即ち前説と併せて之を承久の修造を傳ふるものと解し、かの天平創建説に照應せしむべきが如し。承久と言へば眞眞が目録抄を書きたる嘉禎頃なり僅に十數年前なり。殊に聖壽抄が其の創建者と傳ふる松尾勝月上人は眞眞得業と相知の聞なる事抄中に其證あり。此人にして承久の創建と修造とを明にせざる理無ければ、目録抄の説恐らく信を置くに足るべし。

合利殿に併せて一考を要すべきは繪殿造營の權與なり。其事殆ど古記に見えず、然も殿内障子繪の延久元年に成りし事明瞭あれば、その承久を去る遠き以前にあるは疑を容れず。然らば前掲目録抄の記事に見るが如き兩殿合一の制に鑑み、合利殿の創建をも少くとも延久初年に測り得と考ふべきか。此等兩殿の證觸を明明するは太子信仰の史上頗る重要な事に屬すと雖も、史料の完からざるが爲め明快なる斷案を得る事容易ならず。加ふるに建築の遺構上より見たる



志願寺大講堂三十寸果樹園精氣

志願寺大講堂三十寸果樹園精氣... 此の講堂は承久以前に關する所無きを以て、記録上の考察は暫くこゝに留めんとす。

承久の造營を去る百四十餘年を経て此厨子初めて成れりとなせば、其以前に於ては如何にして靈寶を奉安せしか。若し又厨子と堂と分つ可からずとすれば、承久の造營といふもの更に改まりて貞治の再造に係るに非ざるか。此れ此厨子銘の明文によりて與へらるゝ新なる問題なり。然れども此の疑問は幸にして之を解決するの資料尠なからず、先づ考ふべきは第一の問題なり。

兩殿は承久以前に關する所無きを以て、記録上の考察は暫くこゝに留めんとす。

顯つて現存の建築を見るに、其の外部斗拱の風に於て鎌倉初期の特色を認むべく、内陣の諸制亦之と規を合じうするものあり。記録上より認めたる承久の修造を更に再造の意義と解して最も適切なるを覺ゆ。蓋し此時代に所謂修造の直ちに再造を意味するは其例少からず、別當次第に單に造營といひ、聖衆抄に誤つて創建なるかの如く傳へたる消息も亦此間に看取せらるゝなり。

- 大勸進 比丘取實
- 一筋法師實經
- 大法師重玄
- 奉行人 比丘 通惠
- 比丘 崇崇
- 比丘 實崇
- 比丘 英賢
- 寺僧方 僧 辨寂
- 僧 慶福
- 僧 純長
- 承仕 僧 順重
- 宗禪 順實
- 木工 大工 六郎大夫宗圓
- 大工 孫六大夫清次
- 大工 五郎大夫國友
- 大工 九郎大夫宗圓

- 小工 (以下殿帳ノ爲メ不詳)
- 塗師方奉行 僧 長乘
- 僧 幸祐
- 僧 徳曉
- 僧 定祐
- 僧 長圓
- 塗師大工 僧 宗次
- 小工後藤五宗嗣
- 平四郎貞國
- 左近 太郎
- 後藤 太郎
- 道性
- 沙彌 十念
- 隨忍
- 貞治四年乙巳五月十日

承久の造營を去る百四十餘年を経て此厨子初めて成れりとなせば、其以前に於ては如何にして靈寶を奉安せしか。若し又厨子と堂と分つ可からずとすれば、承久の造營といふもの更に改まりて貞治の再造に係るに非ざるか。此れ此厨子銘の明文によりて與へらるゝ新なる問題なり。然れども此の疑問は幸にして之を解決するの資料尠なからず、先づ考ふべきは第一の問題なり。

らむには似つかはしといふべし。要するに吾人は貞治前後に於て須彌壇上の装飾の異同を認めざるを得ざるなり。

貞治新造の厨子の不調和なるはもとの絵畫に對してのみ然るに非ず、此堂と須彌壇とに對しても亦同様なるを見る。既に承久當時の厨子の別に存するありて、加ふるに此の如き形體の不調和ありとすれば、貞治新造の宮殿が此の堂内の異分子なるは疑を容れず、之に依つて堂其物の年代を疑はんとせしが如きは最早や問題とならざるなり。然れども堂内種々の莊嚴具は此の厨子を除きて悉く承久の造立なりとも解すべからず。新舊相交はり類同と共に差別の相あるは後に項を改めて説く所の如し。

第八圖は舍利殿内陣を右側面より見たる概観なり。其の主なるものに就ては個々に記載すべければ茲には言はず。正面花机の上に載せたる小厨子は舍利と因縁ある南無佛太子を安置するものにして像と共に近代の製作に係る。天井には鎌倉時代に盛行せる折上小組格天井の通式を見るべく、左方の障子繪は先に紹介せしもの、一にして、周文王潤演に呂尚と邂逅するの圖なり。

第一圖 (其一) 厨子及須彌壇 厨子高八尺五寸、巾七尺四寸、
須彌壇高九尺三寸、正面長九尺三寸、上面長二尺八寸五分、
上面より須彌壇下迄一尺九寸

第二圖 (其二) 須彌壇細部

第三圖 (其三) 須彌壇香寮間孔雀

厨子の年代に就ては前項其の天井裏の銘文を掲げて詳説せり。鎌倉

風の最も普通なる様式に屬すと雖も、欄間の几帳面を取りたる縁金物の唐草の類れたる線など、一は承久當初の内厨子のものに比し他は同じ須彌壇の夫れに比べて、推移の跡を徴するに足る。須彌壇の形式は藤原時代の餘風を承けて鎌倉期に盛行せるもの、一なり。羽目中の孔雀は木彫を以て銅板打出の技に代へたるもの、前代以來慣用の題材を踏襲して漸く生氣を失はんとするを見るべし。香寮間の曲線は覆輪の爲めに勢を殺がれたれど猶ほ頗る見るに足るべく、金物の蓮華唐草及び木造通連の美と相待ちて此壇の時代を確認せしむ。

第四圖 (其四) 天蓋 通連 天蓋頂上二尺四寸、
天蓋頂上より須彌壇下欄まで一尺九寸一分

第五圖 (其五) 天蓋仰觀圖

第六圖 (其六) 環珞及幡 幡總長五尺三寸五分

第七圖 (其七) 華鬘 一尺二寸三分巾一尺四寸三分

第九圖 (其九) 厨子内舍利塔安置

第十圖 (其十) 舍利塔出現

第十一圖 (其十一) 舍利塔莊嚴

第十二圖 (其十二) 舍利塔寶蓋

第十三圖 (其十三) 舍利塔蓮花臺及刺銘寶蓋

貞治年中宮殿の新造ありてより、舍利塔安置の厨子が其の内厨子の一となりて右側面に置かれたるは前項所説の如し。是に於て舍利塔供養の際塔を正面に移座するの必要を生ぜしなるべく前面外陣に近く天蓋の懸れるは此の際に備へんが爲めなり。第十圖は天蓋下に舍利塔を奉安せる供養の作法を示す。

第四圖及第五圖 天蓋は上記の理由に依り、貞治の頃宮殿の造營に伴ひて作られしものなるべく、形式上此の環塔と彼の橋第六圖と手法の類似に依りても又之を確め得べし。尤心を廻る天人の姿態殊に輕衣の繁脣に流れざる形状の如き、地に施したる麻葉模様は精巧なる鍍金を用ゐたるが如き、又環塔の金物の比較的動健なる唐草模様は如き、此の時代のものとして寧ろ古調を帯びたるは注目し得べき。

第六圖の一は貞治新造宮殿正面の内側に懸れる環塔の一部なり。一見推古朝の風を模して之に及ぶ能はざる後人の手腕を看取し得べく、中世に於ける擬古的意匠の一遺例として珍重するに足る。二は同宮殿の左右前部に懸れる銅橋を二分して影寫せるもの、前者の如く露骨ならざるも上部の唐草模様には尙ほ推古の餘響を窺ふべし。されど中央の蓮華と輪寶羯磨とは鎌倉風の未だ衰へざるものといふべく羯磨に配するに四方の三結頭を以てしたる下の間の如き殊に意匠の變化を見る。兩者共に宮殿と同時の作なるは疑無かるべし。

第七圖の華蓋は堂内四壁の天井支輪下に懸れるもの、革製、寶相花唐草を透かして、座と縁と結紐とのみに金物を用ふ。寶相花を以て一面の文様を作ること古風と稱すべきも、審に其唐草の線條を見るに、藤原時代の遺品例へば東寺の牛皮華蓋の如きものと同日の談に非ず。彩色法の縹調を混用して純ならざるが如き亦然り。其金物中の唐草の性質が全然貞治新造宮殿のものに一致するより見れば、其製作年代は問はずして明かなり。

第九圖は貞治新造宮殿の右側面を開きて、承久當初の厨子内に含

利塔安置の體を見たるものなり。塔は常に七重の鈴に包まる。供養の際之を開きて塔身座全部を表はせるもの即ち第十一圖なり。第十二及び第十三圖は更に塔身と座とを分ちて各々巨大に表はせり。塔は所謂太子御奉内之御舍利を安ず。水塔或は玉塔の稱あるが如く五輪塔形の主部は水晶にして、水上蓮華を浮べたる座と其他の附屬物とは銀製なり。花蓋は椀座のみ木製、他は銅製鍍金なり。下段椀座の裏に左の刻銘あり

法隆寺上宮王院

御舍利 花臺

貞和四年戊子五月

勸進所北室

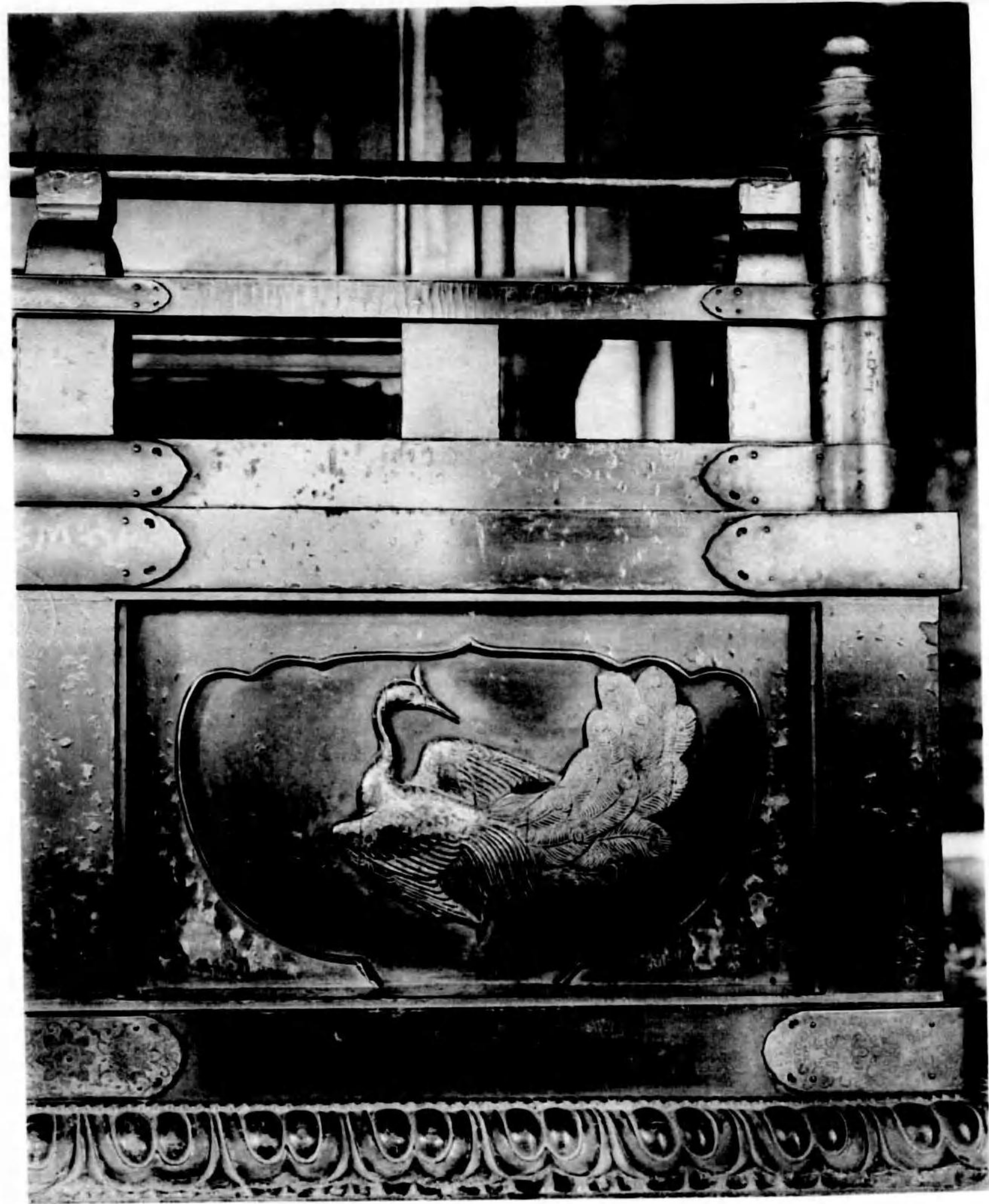
別當記に貞和四年五月四日御舍利殿銅花臺始出來北室沙汰とあるもの全く之に符合す。更に同記に據れば貞和三年十一月十日御舍利殿水精塔出來北室沙汰とあり。塔も又殆ど同時の作なるを知るべく塔と座と共に其の形式の此時代に相應するは論を疑はず。思ふに貞和より貞治に至る十數年の間は舍利殿再興の時代ともいふべく、堂内の諸莊嚴具の新造せらるゝもの、別當記に屢々見たり。

文和三年十一月中旬御舍利堂關佛等佛具一前新造北室觀上人寄進同机二前寄進但大給は法興僧都寄進

同 四年七月十四日御舍利堂關佛新調料足御舍利堂沙汰奉行北室

同 九月下旬御舍利堂鍍金色ニ塗畢北室沙汰

同 十二月中旬御舍利堂鍍臺二本新調沙汰奉行北室



1873

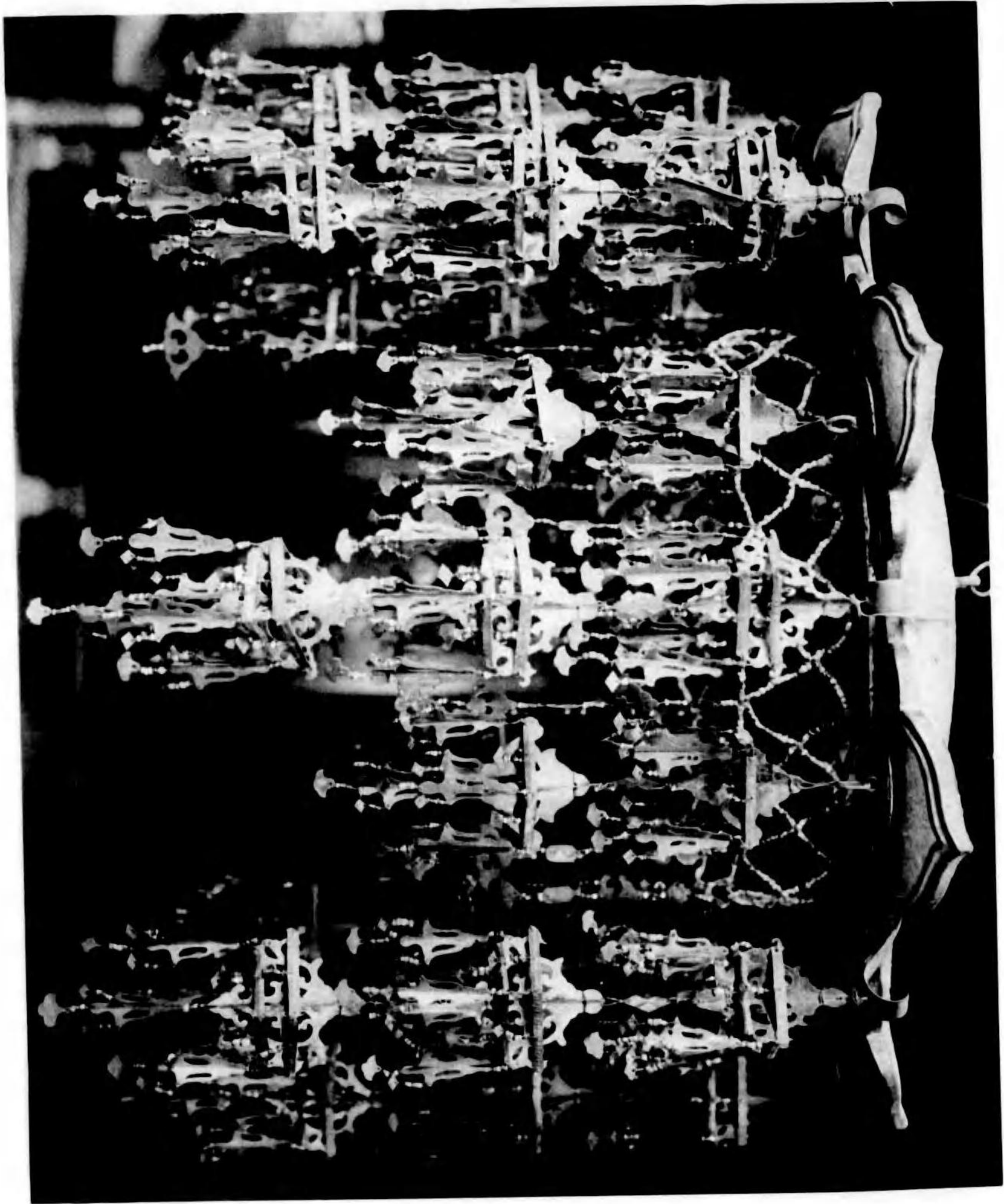
1873

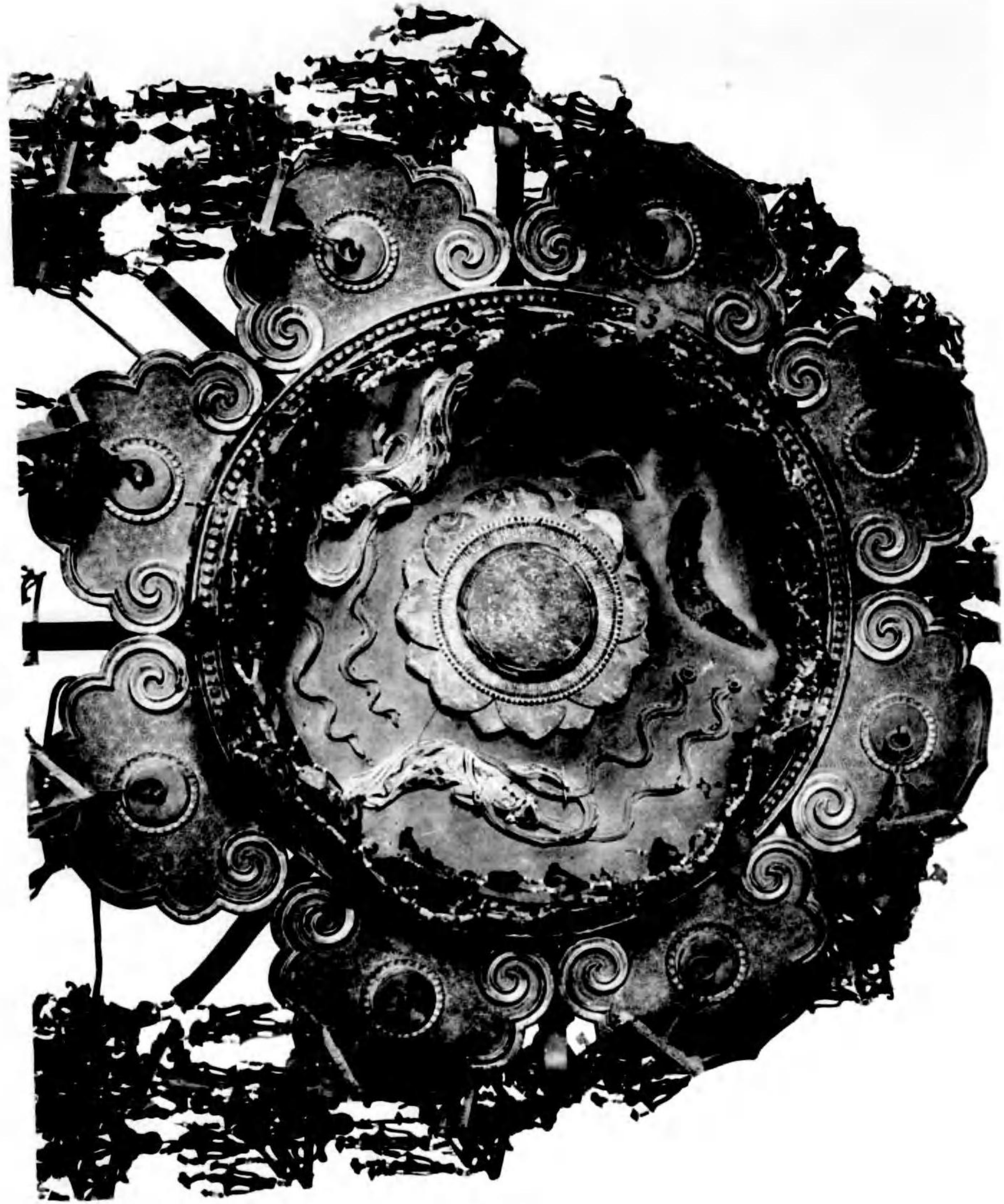
此图即是在前图的基础上，将孔雀的尾羽部分放大，并加以装饰性的处理，使其呈现出一种更加华丽和抽象的形态。



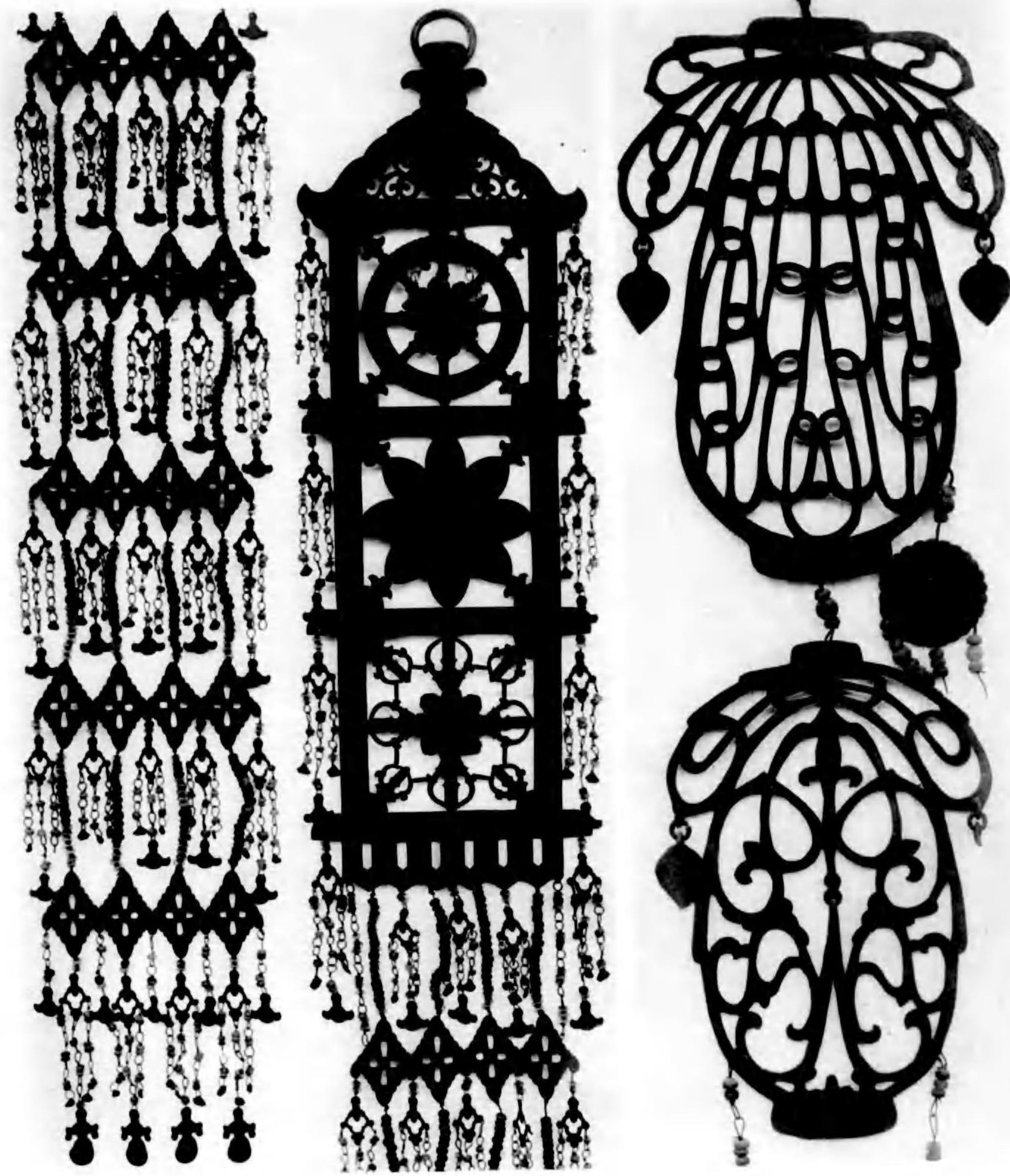
图 10

图 10



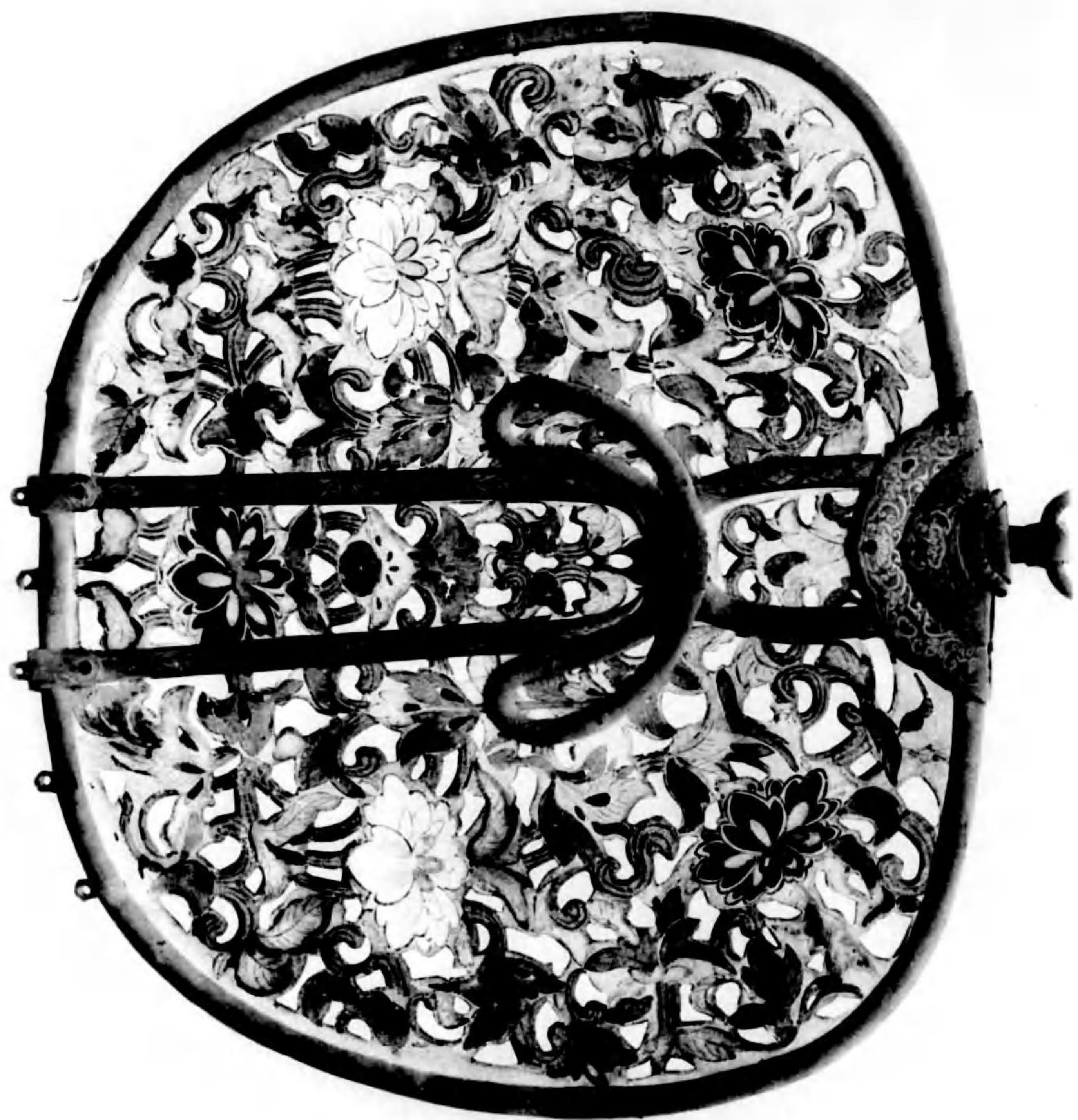


UNIONVILLE, N.C.

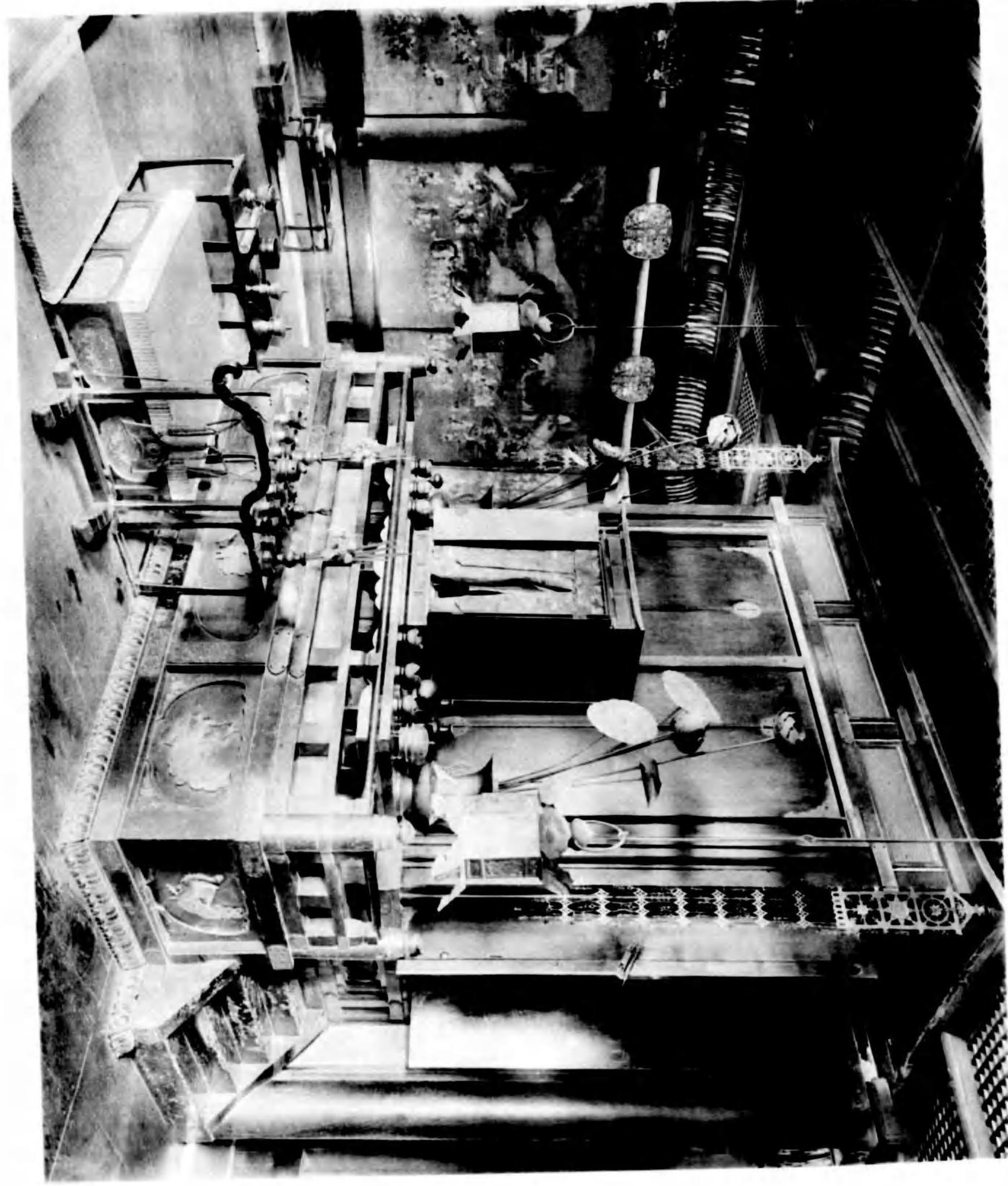


各式掛燈 (一) 飾內燈有奇

中國美術全集



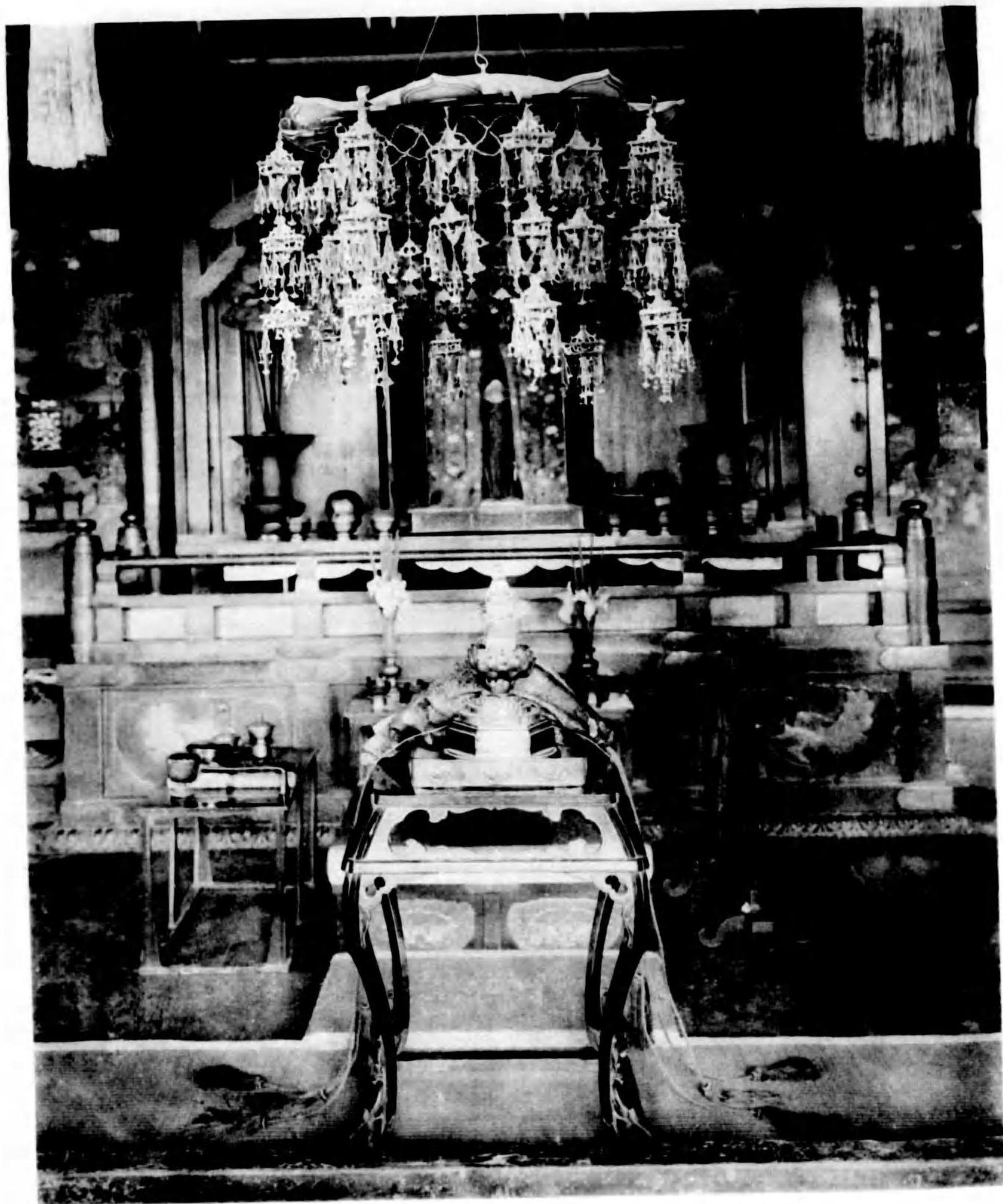
海軍部附屬機關 兵工廠





京都府立総合資料館蔵

京都府立総合資料館蔵



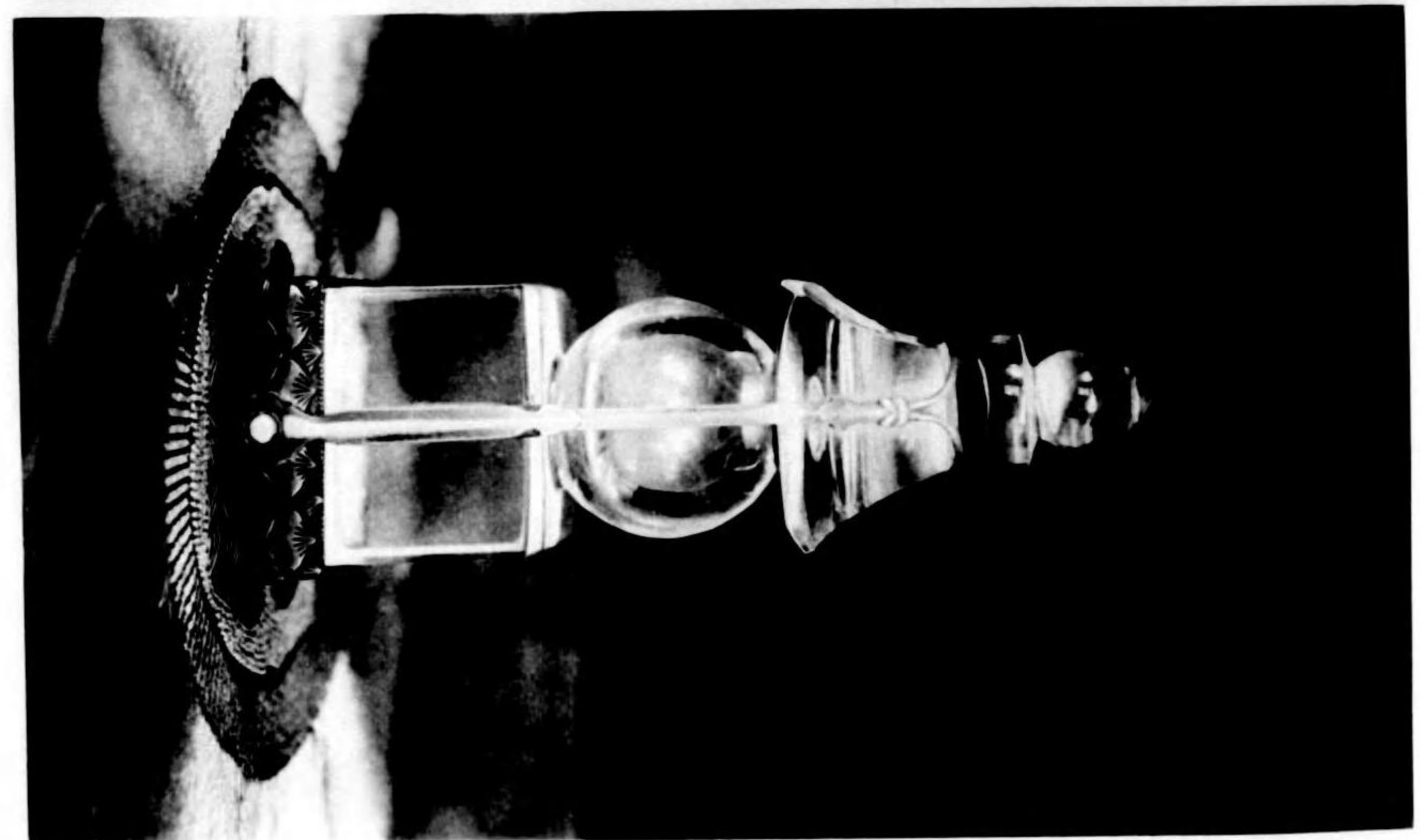
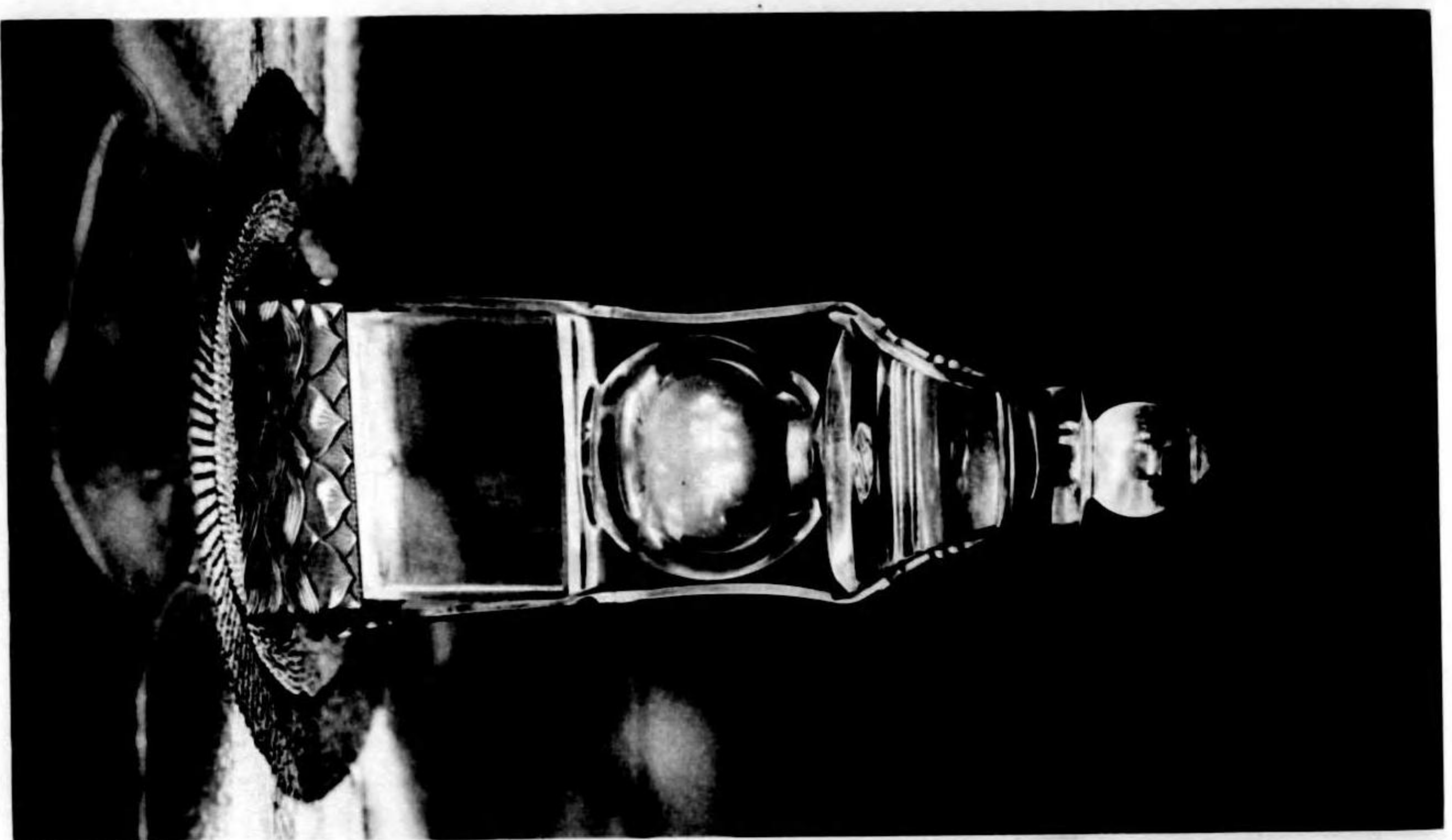
北京... 故宫... 祭坛

北京... 故宫... 祭坛



图版七 一〇 佛舍利塔

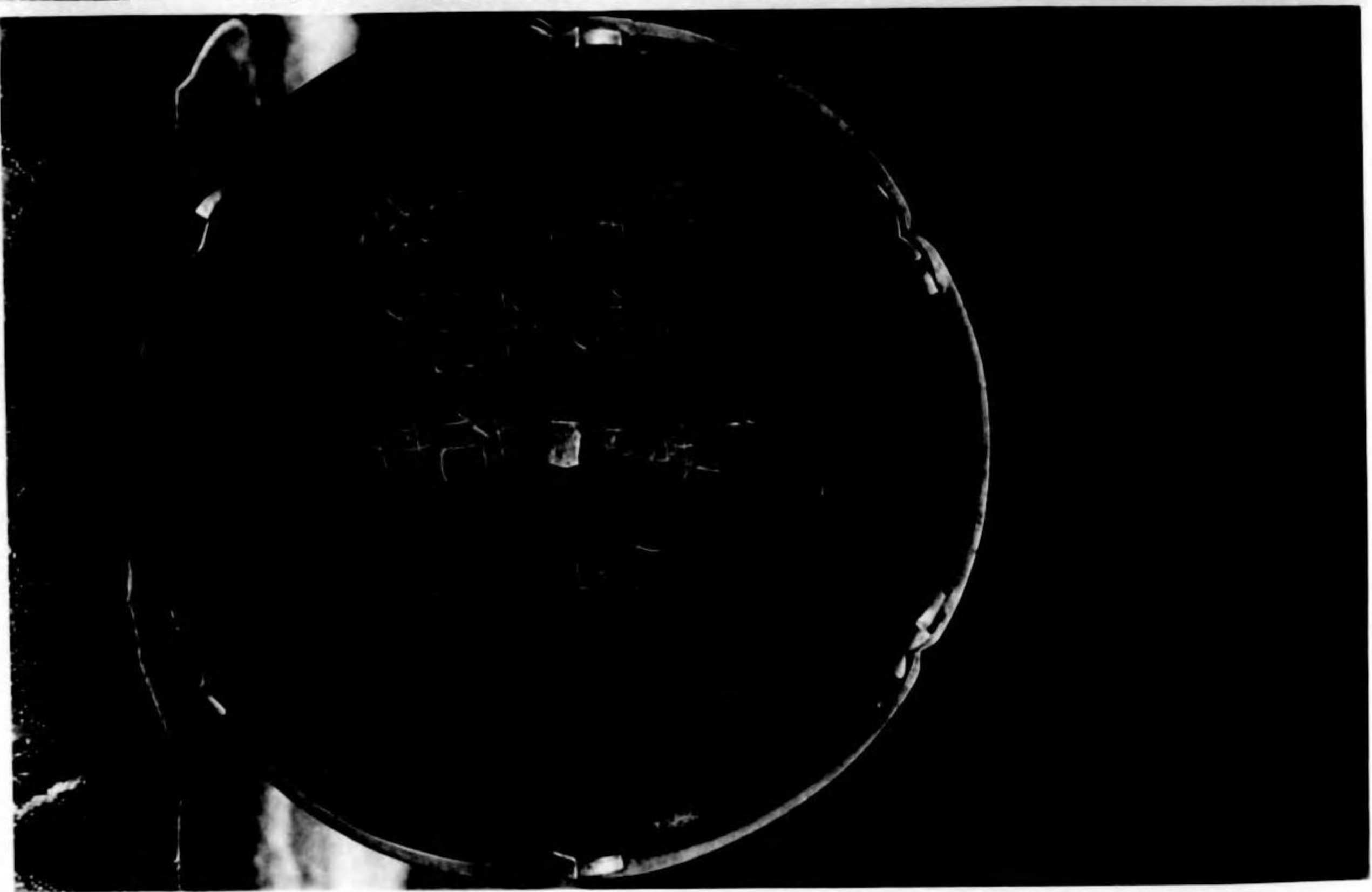
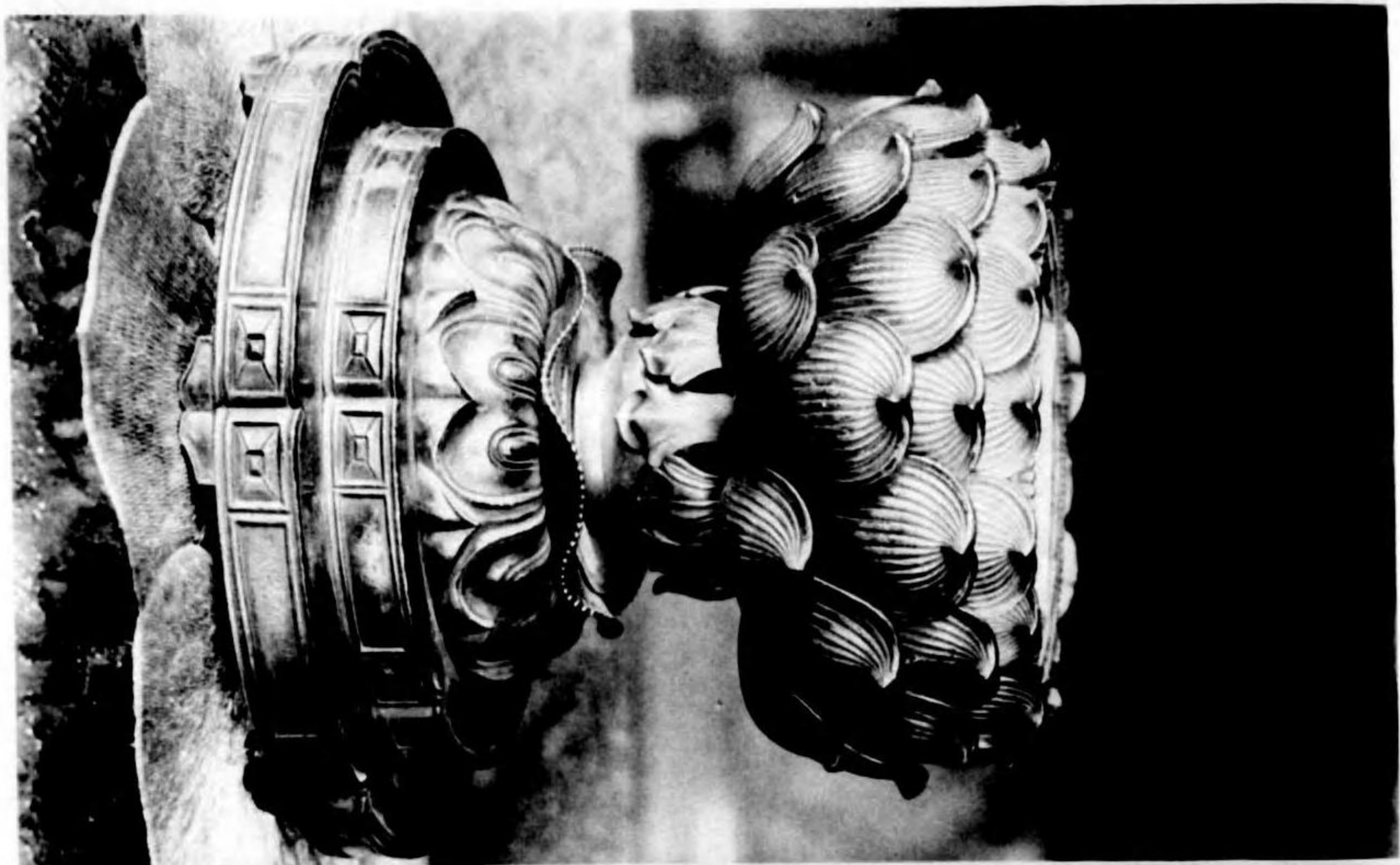
佛舍利塔



塔利奇品水(200)牌內燈科各

圖說

1922



廣州及雲南區博物館藏之石佛舍利塔

廣州及雲南區博物館藏之石佛舍利塔



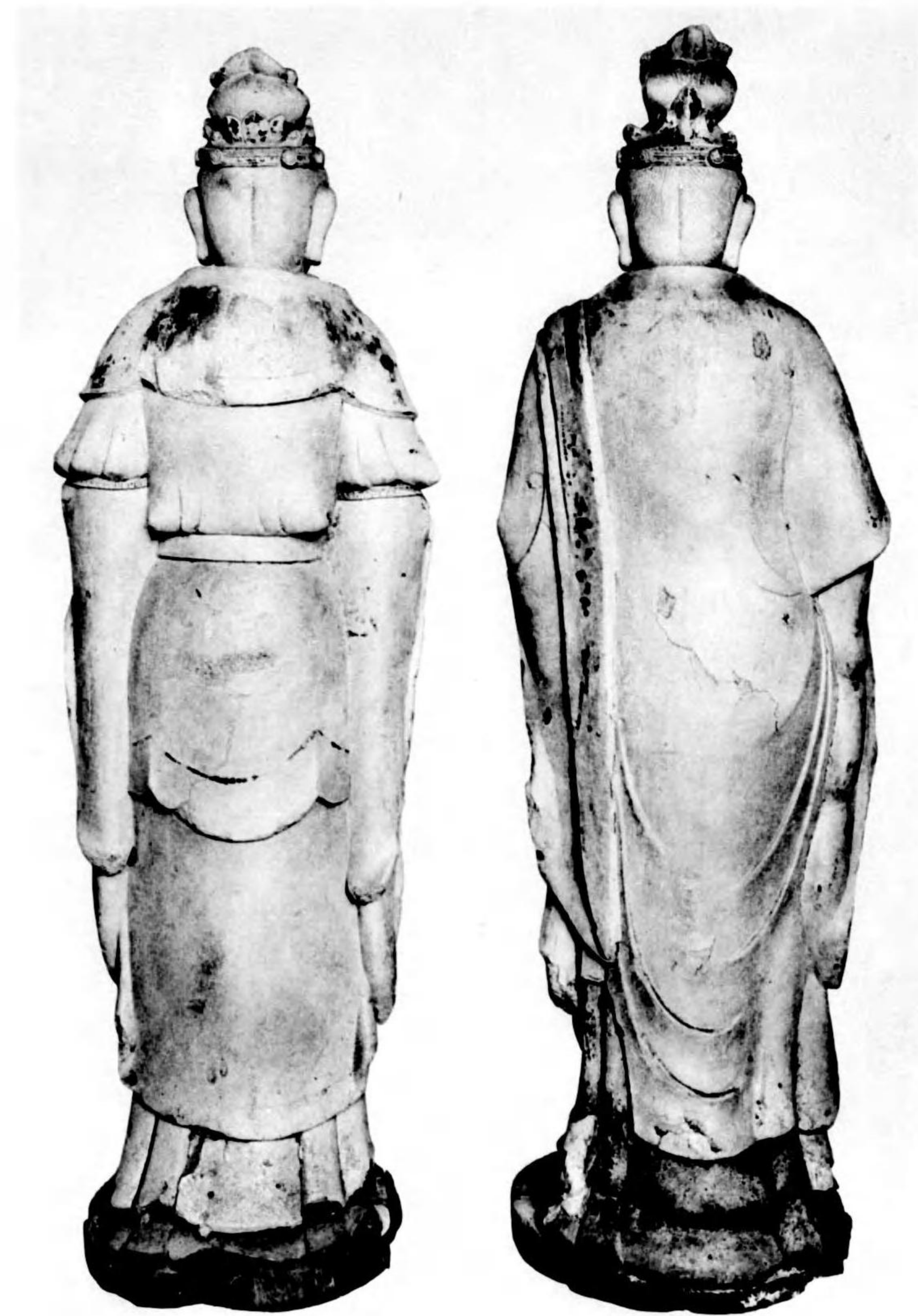
一、觀音天行帝天梵像

東京國立博物館藏



二 佛立天行佛天母塔

高麗七集



東京大正天皇御
御即位二十五年
三月廿一日
御紀行

東京大正天皇御



图 10 唐代天竺佛像一尊（大菩萨天竺像）

图 10 唐代天竺佛像一尊（大菩萨天竺像）



大正十一年
三月
三月

大正十一年三月 大正十一年三月

大正五年十一月廿六日印刷
大正五年十一月三十日發行

大和國法隆寺藏版
東京美術學校編輯

發行者 東京市下谷區上根岸町百廿二番地 白石村治
印刷者 東京市下谷區中根岸町六十八番地 武田勝之助
印刷所 東京市下谷區中根岸町六十八番地 墨彩堂

終

